

令和6年度 山口市医師会・吉南医師会女性医師部会合同研修会報告

竹本 成子

令和7年2月15日(土)19時から山口市医師会大会議室に於いて、山口市医師会・吉南医師会女性医師部会合同研修会が開催されました。参加者は山口市医師会から15名、(男性7名、女性8名)、吉南医師会から1名(女性1名)の合計16名でした。この度は諸般の事情によりweb配信は行いませんでした。

今回の研修会^{ようすやけんじ}は、講師に山口県立美術館学芸課長の萬屋健司氏をお招きし、本年春に山口県立美術館で開催予定の展覧会についてお話しいただきました。タイトルは「学芸員に聞く!『カナレットとヴェネツィアの輝き』展のみどころ」です。

講師の萬屋健司氏は、長崎県のご出身で、旧大阪外国語大学デンマーク語科をご卒業後、大阪大学大学院やコパンハーゲン大学院で西洋美術史を修められました。2009年から山口県立美術館でご勤務されています。先生のご専門は、西洋美術と日本近代洋画です。山口県立美術館での企画展のみならず、学会発表、講演会とご活躍です。

2020年、コロナ禍で開催された「ハマスホイとデンマーク絵画」展をご記憶の方もおられるでしょうか?同展覧会の企画では、第16回西洋美術振興財団賞「学術賞」を受賞されています。

『カナレットとヴェネツィアの輝き』展は昨年7月から静岡県立美術館→SONPO美術館→京都文化博物館と巡回しているもので、本年4月24日～6月22日に山口県立美術館で開催予定です。この度は、同展覧会について6つのポイントについて解説をしていただきました。(以下の番号は萬屋先生のレジメの番号とタイトルです。)

① 『カナレットとヴェネツィアの輝き』展の成り立ちについて

カナレットは18世紀に活躍した画家です。西洋美術史的には巨匠!らしいのですが、日本では一般的に馴染みのない画家です(私は存じあげませんでした)。今回巡回展を行うにあたり日本でのカナレットの知名度がイマイチであったため(集客力を上げるために)、

カナレットに影響を受け、ヴェネツィアに魅せられた画家たちの作品と合わせて展示しようということになったそうです。コンセプトの決定、それに合わせた絵画のリストの作成、出品交渉と萬屋先生は他の3つの美術館の学芸員さんと協力して勧められたそうです。

展覧会から離れますが、海外から作品をお借りする際、貸主の美術館の学芸員は作品の梱包、運送(同じ飛行機に乗って)、荷解き、展示前の順化、展示まで同行し、見守るそうです。一旦人のみ帰国しますが、作品の返却時にはまた来日して、逆の作業にあたり、作品と共に帰国するそうです。ところが、コロナ禍が世界を覆っていた時期、人の往来が制限されたため、借りる側の学芸員が日本に到着した作品の梱包状況や、展示状況を写真や動画で事細く実況し貸主側のチェックを仰ぐといった形になりました。従って、各国の美術館の作品貸し出しの規定がコロナ禍前に比べ厳しくなっているそうです。こういった、ご苦労話も興味深かったです。

では、展覧会情報に戻ります。

② カナレット…「絵になる景色」を絵にした男
カナレットは、1697年にヴェネツィアに生まれました。舞台背景画家を生業としていた父のもとで働きながら遠近法の基礎や空間の活かし方を学び、絵の修行を積んでいきました。遠近法を駆使し、緻密な書き込みを加えることで、カナレットは大迫力で活力のある風景を描くことができたのです。このような都市の景観を極めて精密かつ大規模に描いた作品をVedutaヴェドゥータ(都市景観画)といいます。ヴェドゥータ(veduta)とはイタリア語で景観(view)の意味です。

カナレットは大運河、サン・マルコ広場、リアルト橋など“ザ・ヴェネツィア”というべき名所に加え、日常的で楽しげな街並み、運河でのレガッタ、カーニバルなどヴェネツィアの活気を緻密に描きました。まさに「絵になる景色」今風には「映える景色」を絵にした男でした。

さて、18世紀の英国では、グランドツアーという裕福な貴族の子弟が学業の総仕上げに行う大規模な外国旅行（数ヶ月～数年の期間でなされた）が盛んでした。行き先として文化先進国のフランスやイタリアが人気だったようです。イタリアでは、古代ローマの遺跡やルネッサンスの遺産を訪れ考古学や芸術に触れ、カーニバルの街ヴェネツィアで打ち上げしたといったところでしょうか。旅の記念にカナレットのヴェドゥータを購入する貴族子弟が多かったそうです。

カナレットのパトロンであった、英国人画商ジョゼフ＝スミスがこういった客とカナレットを結びつけ、カナレットの絵は数年の入荷待ちとなるほどの大人気となっていたのです。

③ カナレットと英国

こうして旅の記念品として英国に渡っていったカナレットのヴェドゥータでしたが、1740年～1748年のオーストリア継承戦争のため、グランドツアーが一時行われなくなり、絵画の注文がなくなってしまいました。そこで、カナレットは自分の絵を評価してくれた英国に渡りました。そのため、カナレットの作品にはいくつかの英国のヴェドゥータもあります。

英国に10年滞在したカナレットは、58歳の時ヴェネツィアに戻りました。66歳の時ヴェネツィア絵画彫刻アカデミー会員に選出されたのですが、1768年に70歳で死去しています。

当時の西洋絵画ジャンルにはヒエラルキーがありました（図1）。

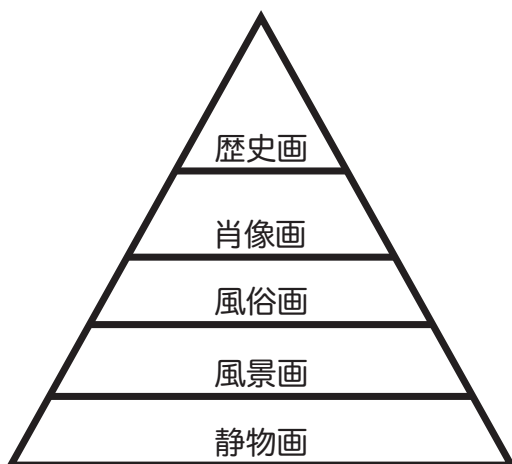


図1：絵画ジャンルのヒエラルキー

頂点は歴史画です。古代の歴史、聖書の物語、ギリシア・ローマ神話などを描いた絵画で、描く画家も鑑賞者も、描かれる内容を理解できる知性と品格が必要となります。

次は肖像画です。王侯貴族といった身分と資金のある人を描いた絵です。

3番目は風俗画です。人間の日常を描いた絵です。

4番目は風景画、5番目は静物画という順番だったようです。

人や動物といった動きのあるものは難しく、描くためには解剖学など専門的な知識も必要だったためです。人物の背景として考えられていた風景画や静物画とは一線を画していたようです。このため風景画や静物画を描く人はなかなか画家とは認められなかったそうです。カナレットは人気作家でしたが、ヴェネツィアで画家として認められたのは晩年だったのです。

④ カナレットの後継者たち

展覧会では、カナレットの甥ベルナルド・ベロッドやカナレットに学んだフランチェスコ・グアルディ、英国で交流のあったウィリアム・ジェイムズらが、カナレットの影響を受けつつ、ヴェドゥータを発展させていく様子が展示されています。

⑤ ヴェネツィア…画家を虜にしてきた水の都

19世紀になると、カナレットのような緻密な風景画ではなく、画家独自の印象が絵に投影されるような風景画になっていきました。旅行者が感動した風景、持ち帰って思い出す風景の絵は必要なくなっていったところでしょうか。ロマン主義や印象派の画家たちは映えるヴェネツィアだけでなく、ヴェネツィアの裏側も描いています。

印象派の巨匠モネは晩年ヴェネツィアに滞在し、数十点の作品を残しています。このうちの数点も展示される予定だそうです。

⑥ 展覧会の見どころ

この度の展覧会では、スコットランド国立美術館をはじめとする英国のコレクションを中心に、油彩、素描、版画など約60点が展示されます。そのうち19点がカナレットの作品です。国内に数点しかない珍しいカナレットの作品を一度に観る貴重な機会といえます。さらに、カナレットの影響を受けた印象派の

作品を通じて、さまざまなヴェネツィアの姿を楽しめそうです。

5月3日、5月10日、5月17日にはギャラリートークも予定されているそうです。詳しくは山口県立美術館のHPをご覧くださいませ。萬屋先生の淡々としつつもカナレットを知ってほしいという情熱に溢れたお話に引き込まれ、あっという間の1時間でした。すぐにでも展覧会に出かけて行って、ヴェドゥータをじっくり鑑賞したくなりました。

私にとって、ヴェネツィアは行ってみたい憧れの地です。展覧会で旅気分を感じつつ予習をしてみようと思います。すでにヴェネツィアを訪れた方々には、思い出のお写真とカナレットの絵画を見比べてみるなど普通の美術鑑賞と違った楽しみ方もできるのではないのでしょうか？

この研修会ではこれからも（好奇心の赴くままに）楽しいテーマで教養を深めつつ、参加者の交流の場としての活動を継続していきたいと思っております。皆様どうぞ参加くださいませ。

